

二十五年ぶりの教育実習

——イギリス公立幼稚園保育参加顛末(1)——

豊田 一秀

朝九時、子どもたちは親に手を引かれて、三々五々、ここブルークラスの部屋にやって来る。入口近くのテーブルには子どもの名前を書いたカードが置かれていて、母親は子どもにスペルを示しつつ、自分の子どものカードを教えている。カードはテーブルに立てられた二つ折りのボードのポケットに差し込まれ、出席の印になる。

母親にお別れのキスをして、すぐに皆の座っている方に行く子、なかなかサヨナラのできない子、色々である。先生はにこやかに子どもたちを受け入れ、無理に親から離すようなことはしない。親も無理に子どもを部屋に残して帰ってしまうようなことはない。ぐずる子を抱いて他の親や先生と話をしたりしている。先生、親、そして子ども、誰もあまり

急いでいないようで、穏やかな朝の風景である。

ここは、ロンドンの南西約五十キロに位置するギルフォード市の公立幼稚園 (State Nursery School) である。ギルフォードは人口十二万三千人程の美しい街で、『不思議な国のアリス』の作者、ルイス・キャロルの住んでいた街としても知られている。

一九九七年九月より、私はこの幼稚園の保育に参加することを許された。週に一回程の参加であるが、イギリスの幼児教育の実際を知る絶好の機会である。

こちらに来てから、これまでも色々な幼児教育の現場を見る機会を持ったが、それは大体に於て一日のみの「参観」であったので、こうして保育に定期的に「参加」できる機会を与えられたことは私にとって大きな喜びであった。

保育に参加するに当たって、私が第一に大切にしたいと思った事、それは丁寧に体験するという事である。私が見た事、聞いた事、触れた事、した事、された事……等々をそのままに、しかし、きちっと感じ、思い、そして心に留めたい。これは当たり前のようにできてなかなか難しいことである。自分の心を自由に保ちつつ、その場に真剣に誠意を持って臨むことが、この事を可能にする一つの方法であろう。心を自由に保つとは、私の場合、自分の過去の経験から自由になろうとする事、自分を肯定し過ぎないよう、否定し過ぎないようにする事などを含んでいる。

日常の保育を共に行う事を通して、子どもや現場の先生たちと仲良くなり、相互理解を深めて行くこと。その過程自体の中に大切な宝が隠されているように思う。

第二に、そこで得た体験を「体験した自分」をも

含めて考え直してみる——自分は何故そのように
に応答したのだろうか、何故そのように感じたの
だろうか、又、何故何も感じなかったのだろうか
……。すなわち、自分を観るもう一人の自分の目
を通して、自分の体験を省察してみる。この過程
を通して、私の「気付き」は自分自身に対する気付
きにまで迫ることが出来るであろう。

私はイギリスの幼児教育の考え方、問題点、制
度、社会的認知、教師の持つ価値観、さらにイギ
リス人の子どもの育て方などに興味を持っている。こ
れらの事を調べる方法は色々あるに違いないが、私
は大学で学ぶと同時に、教育現場に参加するという
方法の中から洞察を得たいと考えている。教育の現
場という所は実践の場であり、いつも忙しく、現実
的問題に溢れ「理路整然」としている場所ではな
い。しかし、教育問題の最前線に身を置いてこそ見
えてくる問題もまたあるはずである。例えて言え



▲「これでいい？」
自分の名前の書かれた出席カードを探す子ども

ば、山の様子を地図で学ぶのに合わせて、実際に山を歩くことによっても学んでみると言えるだろうか。どちらも大切には違いない。山を歩くのは身体が疲れる、しかも全ての山に登るわけにはいかない。しかし、汗して登った山には特別な思いが残る。その思い出の中に、身体知と言ったものが含まれているであろう。

「自分の過去の経験から自由になる」等と軽々しく書いたが、私には日本で約二十年に渡って幼稚園の教師をしたという過去の経験がある。これは消す事の出来ない事実である。私は、「私——日本人の幼稚園教師」として、イギリスの日常の保育に参加する中から何を感じ、何を得るのか、又、どのように受け入れられ、どのように批判されるのか、先生や子ども達とどんな人間関係を創れるのか、さらに、自分のどのような片寄り（バイアス）に気付けるのか、それは日本人としての共通性を持った特性なの

か、それとも私自身の問題なのか……。これは自分自身を使った一つの実験と言えない事もないだろう。

少し幼稚園の背景について説明したい。この幼稚園はサリー州（強いて言えば日本の県に当たる行政単位）に五園ある公立幼稚園の内の一つで、一九四五年に創立されている。保育料は無料である。人口約一〇四万人のサリー州に公立幼稚園が五園という数字からだけでも、幼児教育の実情が日本とは大きく異なっていることが想像できるであろう。因みに日本には国公立合わせて六二一七園の幼稚園があり（一九九五年）人口で割ると、約二万人に一園の割合となる。当然、入園希望者は多く、生後しばらくから予約が受け付けられるが、この幼稚園の入園希望者リストには三〇〇人以上の名前が並んでいるという（イギリスの幼児教育の社会的な問題については、何かの機会に触れたいと思う）。

日本の幼稚園と基本的に異なる点をいくつか上げておこう。第一に園児の年齢である。イギリスの義務教育は五歳から始まるために、幼稚園には五歳児は存在しない。しかも、小学校にレセプションクラスというクラスを作り、四歳児からそこに受け入れようとする動きが広がっているために、この幼稚園でも九月に三歳になった三歳児が中心となり、四歳児は四分の一位の割合になる。学年の途中でレセプションクラスに移ってしまう子どもも多く、その度にウェイトィングリストから順次入園させるので子どもの出入りが非常に頻繁となる。

一日の保育時間もまた複雑である。(1)九時に来て、昼の給食を食べて二時半に降園するフルタイムの子ども (2)九時に来て、給食を食べて十二時十五分過ぎに降園する子ども (3)九時に来て、給食前の十一時半に降園する子ども (4)午後一時に来て、三時半まで過ごす午後のセッションの子ども、と四つ



▲先生が出席を取っている間に、朝のフルーツを配る子ども

のコースが混在する。こんな状態なので、クラスの人数も日本のように簡単には説明できないが、大体二十四人位の子どもが、入れ替わりしつつクラスにいて、その内十八人が給食を食べるといったところであろうか。

この幼稚園のクラス数は三クラスで、各クラスを基本的に二人の教師で担任する。この他に、特に援助の必要な子どもがいる場合にはパートタイムの先生が専門につく。私が入ったブルークラスには、行動の乱暴な男児、言葉の遅れのある男児、それぞれのために二人の先生が援助についていた。日本から見ると羨ましい教師の数である（単純に、大人の数が多ければ良いというものではないが）。

さて、九時也大分過ぎ、子どもたちも揃ってきた。子どもたちは保育室の一角にあるカーペットに丸く座って後から登園する子どもを待っている。大

体人数が揃った頃、先生は朝の出欠を取る。名前を呼ばれた子どもたちは「イエス、ミセス○○！」と、先生の名字を呼ぶ事を求められる。少し私語があるとシートと先生に注意されてしまう。私の基準からみると十分に静かなのだが……。子どもは「そこにおいても、いないかのように静かにしているのがよい」というビクトリア朝の価値観がまだ生きているのだろうか。この先生たちが、日本のかつての私のクラスの「賑やかさ」を見たらなんと思うであろうか、フツと不安がよぎる。イギリスの先生の「当たり前」的な価値観、こんな点についても考えてみたい。

さあ、一日の始まり！。気持ちを引き締めて一日を過ごそう。二十五年ぶりの教育実習の始まりである。

（ローハンプトンインステイテュート ロンドン

客員研究員）